Japanese Association of Educational Psychology

臨床・障害 1 (901～908)

座長　西村章次・海塚敏郎

901 「実践と発達の診断（試案）表」の検討 (3)
——効果の類型的検討——
埼玉大学　西村章次

902 描画における Grasp の変容
——(1)正常幼児の発達的変容——

903 〃
——(2)心身障害児（者）の特徴——
東京都立府中療育センター　①平井泉美
②吉村栄一

904 脊髄損傷患者の知覚脱失性疼痛について
白梅短期大学　八木孝彦

905 小児切断者における障害の認知
東京都補装具研究所　浪江久美子

906 肢体不自由児病室において一人遊びの多く見られる子供の特性について
都立北療育園　三浦勝雄

907 心身障害児の治療教育
——治療教育者の問題——
福岡教育大学　海塚敏郎

908 肢体不自由児の研究 (14)
——絵画刺激によるイメージ測定の有効性——
大阪市立身体障害者福祉センター　森津誠

〈901〉船津（福岡教大）より SDR の具体的内容と，それが自閉児の自己刺激行動，自傷行為とどのような関係を持つのかとの質問がされた。これに対し，自己刺激的行動を含むより広い範囲で SDR をとらえているという応答。さらに具体例をあげ，自己刺激的行動が手指の操作性と逆相関にあることが説明された。〈902〉〈903〉西村（埼玉大）より，1歳前の発達段階にこそ手指の発達でみなければならない過程があるのではないかという質問があった。これに対して，描画活動における筆記具のもち方の発達プロセスは物のつかみ方に見られる発達に包括されると考えるより，むしろ，描画活動の精神発達の側面と運動発達の相乗するところではじめて適切な grasp が得られると思うとの応答がなされた。さらに，発達，道具の形態・支持性・固定性・回旋性などの諸条件を整理していくことの必要性について指摘があった。〈904〉西村（埼玉大）から，神経心理学的研究と心理的・精神医学的研究の両面からの接近の必要性が指摘され，これに対して，障害に伴なうさまざまな心理的事象の中で痛みの占める位置は重要と思うが，心理学的な痛み研究はまだ痛み感覚の一次元性を仮定している段階だと思われるという意見。痛みの感覚次元を考えていくとき，患者から直接，情報を得ることは研究の第1歩であるとの応答がなされた。さらに，今回の発表では精神医学的障害を持つ者は含まれていないが，神経症的反応の要因は配慮される必要があるとの説明があった。

〈905〉馬場（室蘭工大）から，障害認知の総合性が指摘され，社会的・心理的・生理的な側面からケース・バイ・ケースによる問題への接近の必要性が述べられた。これに対して，何よりもまず問題についての基礎的データの積み重ねの必要性が強調された。西村（埼玉大）から，発言内容のカテゴリー化の意義が述べられ，これには，その際，母親の記述の正確性，表現力，観察力などの吟味がまず必要であるとの意見が出された。

〈906〉船津（福岡教大）から，ここでいう「1人遊び」は情動行為のような1つの異常行為として考えられ，遊びとして積極的にとらえていいものかどうかとの疑問が出された。これに対し，今回の発表では発達に関したものよりむしろ精神病理学的な1人遊びと考えられるという回答。さらに，障害児の遊びを促進するためには外からの働きかけとともに，時機の熟するのを待つ必要もあるとの意見が出された。

〈907〉茂木（立正大）より，「機能的教師」の概念について質問があり，専門的技能と個人的資質の両座標軸の中で位置づけられるとの応答がされた。「治療教育」と「障害児教育」の理解の仕方について深津（都立神経研）から質問が出された。これについて，障害児の教育は現実的には綜合的な発達援助であり，チーム・アプローチはますます必要不可欠になっている。しかも，こうしたトータル・アプローチがさまざまの理由から実際には教師集団によってとられざるを得ない状況になっていることが多い。従って，治療教育と障害児教育の実質区別の意義理解が難しいことが述べられた。

〈908〉西村（埼玉大）の，とらえたイメージが表層的なものではないかとの指摘に対して，この研究目的は認知的イメージを測定することであり，各イメージの置かれている位置そのものよりその布置を検討していけば必ずしも表層的な面のみをとらえているとは思わないとの応答があった。最後に，障害児（者）観について討論された。

（西村章次・海塚敏郎）

NII-Electronic Library Service